

農水省 GMO-CC 運営委員長としての 2000 年 10 月 28 日第 3 回会議開会挨拶

2010 年 3 月

若松征男

2000 年、農水省のプロジェクトとして、「遺伝子組換え農作物を考えるコンセンサス会議」が開催された。私はこのコンセンサス会議の設営コンサルタント、そして運営委員長を務めた。ここに掲載するのは、市民パネルがまとめた「鍵となる質問」に情報提供者が回答する会合（公開した）の開会にあたって、運営委員長として挨拶したその内容である。これを本 HP において掲載するのは、参加型イベントの実践報告を一冊の本として刊行するにあたって、公開する意味があると考えたからである。

+++

2000 年 10 月 28 日、開会挨拶

これから遺伝子組換え農作物をテーマにしたコンセンサス会議の第 3 回会合を開会します。私はこのコンセンサス会議の運営委員会委員長を務めます若松と申します。

さて、本日の会合は 10 組 11 人の専門家から、市民パネルにタイシテ鍵となる質問への回答をしていただくことを目的としていますが、これは公開で行い、多くの方を傍聴者として迎えています。そこで、どのような経緯で今日の会合に至ったか、また、これから、どのような経緯を辿るのかなどについて、ごく簡単にご説明します。

なお、コンセンサス会議についてですが、ここにお集まりの皆さんは既にご存知の方がほとんどかも知れません。しかし、やはり一言、申し上げます。これは、社会が今課題としている科学技術問題を、一般市民が評価パネルとなり、多様な専門家からの情報提供を受けた上で討論し、合意に至るといふ、市民参加型のテクノロジー・アセスメント（技術評価）の一つの「方式」です。1986 年（注：ママ）にアメリカの NIH が用いているコンセンサス開発会議という方式を借りて、デンマークで発明されました。現在、ヨーロッパ諸国だけでなく、ニュージーランド、アメリカ、日本、韓国、オーストラリアなど、多くの国々で試みられています。

農水省プロジェクト

このコンセンサス会議は、農水省が農林水産先端技術産業振興センター（STAFF）に委託しているプロジェクト、「遺伝子組換え体についての公募型研究」の一部として、企画・運営されているものです。そして、このコンセンサス会議の結果は、公募型研究のためのテーマとして用いられるよう、運営委員会の意見を付して、STAFF 理事長に手渡します。さらには、農水省の政策を作っていく上で、参考とされることとなります。

企画は昨年 11 月ある農水省の方が、コンセンサス会議とはどのようなものか、お尋ねに私のところに来られたところから始まりました。そして、今年の 6 月下旬、コンセンサス会議方式を実際に適用することとなり、私たち運営委員会が、この会議を透明、公平に運営するために構成されました。

これまでの経緯

7月下旬に市民パネルを全国から公募しましたが、幸い500人に近い方々の応募を頂きました。そして、年齢、男女、地域などを考慮した上で、抽選によってここにおられる18人の方が市民パネルに座られることとなりました。

市民パネルは9月15日、23日の2回にわたって、課題を考えるための基礎的知識の提供を受け、24日には、課題を考えるための「鍵となる質問」を作りました。その目的は、この会議の課題をどう考えたらよいか、そのために、専門家からどのような情報や考え方を聞いたらいいかを明らかにすることです。

今日の課題

今日は、11人、10組の専門家がこの質問への回答を行います。これらの方々には鍵となる質問に対応するよう、運営委員会の判断で選び、お願いしました。この方式のオリジナルのやり方では、用意された専門家パネルのリストから市民パネル自身が選ぶのが普通（注）ですが、今回はさまざまな制約条件などから、このようにいたしました。

+++

（注）ここでは、この方式が「普通」だと述べたが、調査を続けた結果、この方式は実際には、あまり多くは用いられていないことが分かった。

+++

なお、ここで専門家という言葉は、大変広い意味で用いています。例えば、明確な主張・意見をもった団体などから、「意見の専門家」としてここにご参加をお願いしています。

さて、ここでは専門家と市民とが対話することになります。この対話を成り立たせるには、お互い努力して頂かなくてはなりません。その際、同じ平面、あるいは土俵の上に立っていただくことが必要です。これは、特に専門家についていえることです。専門家が、こうなっているのだから、これを受け入れなさい、と言ってしまったのでは、この会議は成り立ちません。この点に加え、それぞれ大変限られた時間の中で回答していただく専門家パネルの方々には、たいへん無理難題を申し上げることとなります。しかし、どうか、ご辛抱をお願いします。

次回以降

今後の予定について申し上げます。

市民パネルは、今日の専門家パネルの回答と質疑応答をもとに、11月3、4日とかけて討論し、「市民の考えと提案」（共通理解と提言）をまとめます。なお、これは非公開です。そして、その結果を11月4日午後2時半から公表する予定です。

その後、私たち運営委員会は11月8日に最後の会議を開き、この成果をどのように研究に結びつけたらよいかについての議論を行い、その意見を合わせて、STAFF理事長にお渡しします。

終わりに、この会議の第1回会合で申し上げたことですが、コンセンサス会議の特徴の一端を、繰り返しお話しし、私の挨拶を終えます。

この方式を用いるということは、市民パネルの皆さんが、「落としどころのない議論」をす

る、ということを意味します。日本の政策が決まっていく場面などで、審議会という仕組みがよく用いられます。そこでは、いわゆる「落としどころ」が決まっていて、そこにたどりつくようにするにすぎない、という批判があります。この会議方式では、そんなことはありません。逆に、評価パネルである市民パネルを、ある一定の方向に誘導することになったら、この会議は失敗です。専門家からの情報提供、意見提供を受けますが、市民パネルは市民パネルだけで討論して考えをまとめていただくのです。

こうした「落としどころ」を決めないで会議やプロジェクトを行うというのは、官僚のもっとも嫌う、あるいは恐れることでしょう。その意味で、農水省がこうした方式を試みる決断をされたことに、改めてもう一度、敬意を表したいのです。

それでは、皆さん、どうぞ、よろしくお願いします。